

浄土

八月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別郵便承認第三五二号)
昭和三十七年七月二十五日 印刷 昭和三十七年七月一日発行

第二十九卷

第八号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

大日方大乘著

B六判上製

三〇二頁

定価四三〇円

〒八〇

仏教衛生学

現代人の必読書

本書は衣・食・住・水・中毒の五項目にわたり、医学的見地より仏教資料を充分に駆使し、新しい分野を開拓している。人は健全な肉体と康安な精神とをもってはじめて健康であり、幸福の源泉があるのだ。ここに現代医学の学ぶべきところがある。

本書を忠実に活用してこそ仏教を現代に生かすことになる。

三幸出版社

東京都千代田区
飯田町 1 の21

仏教医学

大日方大乘著

B六判上製三一二頁

定価三五〇円 八〇円

浄土

八月号

人のつねに悪縁にのみしたしまれ、身には
数遍を申さずして、いたづらに日をくらし、
むなしく夜をあかさん事、荒涼の事にや候は
んずらん。

法然上人御法語



中央アスターナ古墓地(七世紀)
出土。駱駝土偶。

浄土 八月号 目次

表紙 釈迦如来像(京都・蟹満寺)

目はこころの窓……………竹中信常…(2)

宗教と医学 夏の健康……………木村集造…(8)

三分法話 法 事……………後藤真雄…(12)

近代高僧伝 矢吹慶輝……………大橋俊雄…(14)

紀行文 アメリカ旅行(2)……………佐藤治子…(16)

教化の手引 教化の始まり……………中野隆元…(22)

座談会 新浄土宗に望むもの……………(28)

扉の御法語……………(7) 教義すら捨てる……………(11)

非常にも柔和に……………(6) 教界トビック……………(21)

講義 浄土宗入門(その一)……………戸松啓真…(24)

編集後記……………(33)

目はこころの窓

——儀礼の近代化の問題——

竹 中 信 常

(大正大学教授
文学博士)



一

西ベルリンの繁華街クルフルステンダムの一角に、ドイツで一番大きいといわれるデパートがある。そのショーウィンドをのぞいてみて、おどろいたのである。日本のデパートを見なれた目には、実に淋しい飾りであり、品物の数も非常に少ない。広いウィンドケースの中に、点々とちらばっているにすぎない。しみじみと、日本人の幸福を感じたものだった。

ところで、風邪気味だった私は、同行の先生達と分れて、ひとり先にホテルに帰ってベットにもぐり込んだのであるが、その時ふと感じたものである。品数の少ないとい

うことは貧弱かもしれないが、しかしその反面、何かそれに打ちこんだものが感じられる。いくら沢山ならべても、大量生産でムヤミに作ったものには、人にせまるものが出て来ないのではないだろうか。……そしてそのことは「宗教」にもあてはめられる。「宗教の展览会」といわれるほどに、日本には沢山の宗教がある。一軒の家の中でさえ、神棚あり、仏壇あり、台所へ行けば荒神さまのお札、娘の部屋には聖母マリアの像がある。これでは、日本人が一つの宗教、一つの信仰に、全心全霊を打ちこむことの出来ぬのは、あたりまえのことである。

わたしは、ドイツの旅舎で抱いたこの思いを、いままた

心の中によみがえらしているのである。そして何を信じ、いかにおこなってゆくべきかと思ひまどう人々の、余りにも多いことに、いまさらながらおどろいているのである。

口では「お念仏をとえなさい」というその御本人が、念仏の一事もせぬ日をすごしているのである。現在要求されていることは、高等な宗教の理論でもなければ、いたずらに煩雑な教学でもない。いわんや、もっともらしくとりすましたお説教でもない。念仏することなのである。信仰をおこないにあらわすことなのである。自分の抱いている「もの」を、どのように「あらわし」、どのように「おこなう」べきかということにはほかならない。

現代ほど信仰心のうすい時代はないと嘆かれているが、はたしてそうなのか。うすいのは、七百年も千年も経った、古びた仏教々義または仏教々団に対してであって、仏教々理そのもの、またはそれを実践してゆこうとする心情は、かえって盛んなのではあるまいか。ズバリ一本、これだ、という決め手がないままに、大衆はまどっているのではないだろうか。

二

こころみに、一般の人々に、「宗教とはどのようなもの

だと思ひますか」と問うてみるがよい。問いかけられたものが、教養のある、洗練された者であればあるほど、その答えはマチマチであり、理解しにくいものであることを知るであろう。

これにくらべて、ごく素朴な人々、あるいは幼い子供達の答えは、極めて単純で、皮相的ではあるが、それだけに真理をふくんでいることがわかる。端的にいうならば、これ等の人々は、宗教を「念仏すること」「お寺詣りをする」といった具合に割り切っている。宗教というものを、むずかしい理窟や、フワフワした観念としてではなしに、「すること」としてとらえているのである。宗教は実践しなければいけないとか、信仰は行動化さねばならぬとか、やかましくいわれるが、こうした人々は、たくまずして、実に素直おにそれを体現しているのである。

キリスト教では、「考えられる神」とか、「哲学者の神」とかといって、頭の中でだけコネまわされて、一向に実生活の上に働きかけてくれない神に対して、「感ぜられる神」「信仰者の神」を強く主張する。このことはキリスト教をかりなくとも、すでに法然上人が一枚起請文の中で、明快に喝破されているので、いまさらに喋々する必要をみない。しかも宗祖はさらにすすんで専修念仏を高唱して、浄

土の道が実践にあることを強く打ち出されたのである。

けだし、宗教的実践とは、いうまでもなくおのれの抱いている「信仰を体現する」ことにほかならない。内に抱く信仰を、からだの上にあらわしてゆくことである。西行法師が伊勢の大廟に額づいたとき詠んだうたに

なにごとのおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

とあるが、真実に心を一つに打ちこむならば、それは自然に身体的行動となって発露するものである。一茶もまた寒国の冬に暮して、一夕、暖い風呂にとっぷりと身を沈めて

雪の日やけ南無阿弥陀仏と沈みけり

とよんでいる。内にある想念は、かならず何かのかたちで、おもてに湧き出るものなのである。

三

「目はこころの窓」とか、「目は口ほどにものをいい」などといわれる。内なるおもいは目か、口か、からだを通

じてあらわれる。そして、もしその内なる「おもい」が、アミダ仏にかかわるものであったなら、そこからあらわれ出て来るものは、「南無阿弥陀仏」という称名念仏になるのである。

ドイツの或る村の教会での話である。村人たちは、その教会の外側の壁のある一ヶ所を通るとき、かならずおじぎをする風習があった。何故そうするのか誰も知らなかったが、何百年も前からつづいておこなわれて来た風習なので、村人たちは少しも疑わずに、おじぎをしていたところが、あるとき暴風があつて、教会の壁のところどろがはがれおちた。そして、村人たちがいつもおじぎをしていた壁の中から、聖母マリアの像が出たのである。

何も知らず、何も疑わずに、壁にむかつておじぎをしつづけて来た。何十年も、何百年も、祖父、親、子、孫と代々これをつづけて来た。これが真実の信仰の力なのである。文句なしに「おこなう」こと、これが信仰なのである。

……一文不知の愚鈍の身になして……智者のふるまいをせず、ただひたすらに念仏すること、これがわたしどものなすただ一つの道なのである。信仰は行動にまであらわれて本当の信仰になるのである。觀念の念仏が真の意味でないのは、行動にあらわれぬ念仏だからであり、従ってそ

これは「信仰の念仏」ではないのである。

行動はくりかえされてある定まった型をとり、それが宗団でとり上げられ、教義の裏づけを得て「儀礼」となるのである。念仏が専修称名念仏として、今日おこなわれている形にまで定められて来たということの裏には、先にのべたような信仰の核心があつてのことである。そして、それが多勢の人にうけつがれて今日みられるような念仏になつたわけである。

五

念仏するという一つの行為の裏には、こうした複雑ないきさつがふくまれているのであるが、しかし、そんなことはむしろ知らぬほうがよい。ドイツの村人のように、ただ黙って「念仏」すればよい。宗祖のいわれるように、

「ただ一向に」

念仏すべきである。「ただ」ということには「文句なしに」という重い意味があるのである。

ところで、現代人は「ただ一向」に念仏するには余りにも、ものごとを知りすぎている。いわば「意識過剰」であつて、念仏をすなおにうけ入れる余地がないのである。いくらお説教に、講演に、講習会に、口をすっぱくして「念

仏をとなえなさい」といっても、余地のないところには入れられないのである。だから、いまの人に必要なことは、ぎゅうぎゅうにつまっている頭の中の雑物を、一度、全部、はき出させることなのである。こころの中をカラッポにしてやることである。そして、あらためてこのカラッポの心の中に、ポイと念仏をほうり込んでやるのがよい。そうすれば、いわずして自然に、これが信仰の核心となつて、そこから称名念仏の声が湧き出て来ることになる。

問題は、心をカラッポにすること。どうしたら頭の中の雑物をはき出して、素直心になれるのか、ということである。近來、禪がはやるのもこのためである。西洋の理窟ばった合理主義で一杯になった頭の中を、カラッポにするために、理窟とか理論とかをはねとばしてしまふ「禪」を利用しようというのである。ところが、禪によって、一応頭の掃除は出来たが、カラッポの中に何を入れるか、つまり、何を信すべきか、これが禪では出て来ない。禪ブームが行きつまりかけているゆえもまたここにあるのである。

要するに、現代人の余りにもセセコマシイ、そしてギューギューの心に、ゆったりとした余裕を与えねばならぬ。ハリつめた心も、時にひとしきり、空漠たる想いにひたらねばならぬ。——儀礼というものは、理窟はいろいろにつ

けられるだろうが、つきつめていえば、こうしたハリつめた心に、ひとときの余裕をもたらす「信仰の機会」なのである。ヒンヤリと静まった寺の本堂で、じっと座って、やがて詠せられる礼讃の音律に心根を洗う。ステンドグラスを通して、五彩に輝く光線の底で、壮重なパイプオルガンの音に、ミサの詠称を味う。すべてこれ、現代人の心が、

切に求めている刹那なのである。

こうした儀礼が、時を経てねり上げられたものを、わたくしどもは、さらに精練し、さらに近代感覚にマッチするように、工夫をこらしてゆかねばならないのである。儀礼の近代化の問題——これは今日の宗教の生命を左右する重大な問題である。

非常時にも柔和に

ある時、釈尊はこう説法されました。

「衣食住や薬品に不自由しない生活をして

いるからといって、言行が柔和な人がいる。が住んでいて、親切な人、謙遜で静かな人であり、あるとの評判が高かった。この寡婦にカーリつけた。女中は血を流したまま家をとび出し、この女中がいて、この女中もよく働いて、声高く近隣にふれ歩いていった。『親切

しかしその人は、ほんとに柔和な人であるかどうかは、それだけでは判らない。何となればもし衣食住や薬品に不足してくると、言行

は親切で柔和であるが、これは内心の怒りを表面に現わさないだけではなからうか。』と考

ばもし衣食住や薬品に不足してくると、言行

え主人を試すことにした。そこである朝、おヒカーは恐ろしく、乱暴な女であるという評

が柔和でなくなるかも知れないからである。その人がほんとに柔和な人であるかどうか

は、非常の時に逢って見て、初めて判るこ

とである。しかし法を尊び、信仰をもつ人は

故もつと早く起きないのか』といった。そこ

常に行言が柔和であって、この人こそほんと

でカーリは『それはあなたに関係のないこ

に柔和な人であるといえるのである。

とです』と返事をした。寡婦はすっかり腹を

以前に舎衛城にベーデーヒカーという寡婦

立ててしまった。カーリは更に次の朝もお努めることである。法に従って信仰を培うこ

扉の御法語

さとりもあり、ならふむねもありて申さん事は、その心のうちしりがたければ、さだめがたし。在家の人のつねに悪縁にのみしたしまれ、身には数遍を申さずして、いたづらに日をくらし、むなく夜をあかさ事、荒涼の事にや候はんずらん。凡夫は縁にしたがひて退しやすき物なれば、いかにもいかにもはげむべき事也。されば処々におほく念々相續して忘れされといへり。

(十二箇条問答)

「十二箇条問答」は十二の質問に対して、上人がそれぞれ優しくお答えになったものを列記したものであります。どの質問をみても、ほんの些細なことばかりです。本願を信じ、お念仏を申しているのですが、心の奥底にチラッと浮ぶ疑念であつて、しかもどうにもならぬ点を正直に質ねています。それだけ却て質問者のいじらしいまでの真剣さが滲み出ています。

がよいわけです。しかしお念仏を申しているとは普通の人という意味で、在家の家にこだわると、もうこの位で十分ではないか、そんなにまで勤めなくてもと思う心が出てきます。そこでそれ程までに数多く申さなくてもよいでしょうかと、上人に質問しました。それに対する上人のお答えがこの御法語です。

言葉でないわけです。

人の心の内は外からみても判りません。その人がほんとに信仰にもえてお念仏を申しているのか、それともただ慣れっこになつて口先だけのお念仏を申しているのか、見ただけで判るわけがありません。しかし人として、いつも怒ったり妬んだり貪ったりして、よからぬことのみ考え、お念仏一つ申すこともなく漫然とその日その日を暮しては、心根まで荒れはてた頹廢生活といわねばなりません。もともと人間は、何かよい事をしようと

「妄念余念をもちへりみず、散乱不浄をも

思つても、間もなく尻込みしたり永続きのしないものです。だからどの様にしても、精を出してお念仏を申さねばなりません。だからこそその場所場所で、いつもお念仏を絶やすことなく申すのだという理由があるのです。

文中に「在家の人」とありますが、扉には仏、善心のおこる時も南無阿弥陀

お念仏は一万遍より二万遍と数多く申す方 あえて「在家の」の三字を省きました。これ 上人は常に真剣勝負の生活を送られました。

夏の健康

木村集造

(医師)

(一)

ろうか。

今茲に、あなたは幸福なのかと、尋ねたとしたら、多くの人はいささか返答に困ると思う。これと同じくあなたは健康なのかと尋ねたらやはり、その人は返答に窮するのではないだろうか。このように、健康とは一体何んであるのかと考えてみると答は左様に簡単でない事に気がつく。最も生理学者は生理学的に、心理学者は心理学的に一応の答はもっているであろうが、それとて必ずしも納得のゆくような答を得るにはむづかしいのではなか

扱て近頃、世上に、まアネという言葉が流行している。不調和を半肯定してするように響くこの言葉の中にある意味で、現代人のある動きをみるようでなんとこのましく感じるのであるが、若し君は健康かねときく人があったら、私は躊躇しないで、まアネと答えると思う。健康とは凡そ左様なものだといひそかに思っている。というのは、一面、納得のゆかない自分の健康がある筈はないからである。そればかりではない。私等が生存する限り罪を伴はないことはないから、健康という理

想善にむかつてもやはり同じ意味で罪を犯かしているといえる。一方ではまた私達は時間空間の裁きの庭に業縛の自身をさらし続けている。だから如何に勝手に健康の理想像を画いても、遺憾ながら出来あがったものはどうしても現実ばなれしてくる。それは当然といえは当然で、有身の運命といわねばなるまい。

従つて自分の健康を考える時に、生理的な觀念でみたりすると、どうも腎きれトンボのような気がして、誰でも自覚したものと健康の概念と一致してこなくなるのであるまいか。時によってはこの不一致がいろいろの話題をにぎやかすことになり、また歴史をかえるような破目になりかねない。それに健康度が死と関聯してくると、ことは一層悲惨になる。これは一体何であろうか。医学者はすでに医学の分野でないと、これをしりぞけると思われるが、この時ばかりは古い言葉を引用に及んで薬石効なくとかたがつく。医学の非人情が非力が、決定的となる瞬間でもある。従つて健康法というものの名誉も完全に失墜する時節である。私の祖父は、あのド医者奴

がといつて白い眼をむいて死んだ。病氣は癌だった。これと思うと臨終に際して、事実上医学と宗教が分離していることはかなしい事である。

そこで私達は考えるのである。若し健康という概念に生きている人があつたら早晚だまされたことに気付くにちがいない。というのは健康を固定するなどは全く痴人の夢であるから。

そこで漢法では此の間の消息を大乘的に説破している。それは虚心合道である。これによつてはじめて医学と宗教のかけ橋が、成就したと思つてゐる。換言すれば、無心であれば道と合し、医学とも亦合する。無の一字は諸有を包み無余は万物を生じると説いてゐる。本来無一物何処に塵埃あらんといふところ迄ゆけば、医学とか宗教とか分ける必要もなくなつて来る。存在も穩頓自在となつてきようというものである。従つてたとえどんなに、病弱であつたとしても虚心合道の生活であつたなら、その人なりに健康であつたといえると思う。そのわけは體軀の強弱は必ずしも、後天的ばかりとはいえないからでもある。

る。だから漠然と他と比較して彼よりも健康だなどという結論を引き出すのはむしろ概念の遊戲であつて、健康の真の意味は自らの虚心合道の度合によつて測定さる可きものと思われる。

(二)

夏三月を漢法では蕃秀と呼んでいる。その意味は茂るということである。万物が交り、華が実するという。陽氣が少しく下り、陰氣が少しく上り、そして陰陽交るの時節であるから、氣は大いに張つて泄らすがい。このように告げている。だから身体を働かして汗をかき、循環をよくする事は、ものごとの、ふさがつたのが通じるようなもので、身体の調子が出てくる。夏は易經の地天泰の卦にあたるから、象伝の注意がこの際このましいこととなる。過不及なきようにとのことである。泰は字の如く、やすらかであるから、夏という季節は、本来、人間の生活には病氣などの少い恵ぐまれたシーズンといえる。ではどんな風に生活したらよろしいかという

と、夜は並の時間にやすみ、朝は早く起き

る。怒るようなことがあるのは特に禁物で、夏の三月は泰であるから、心はやすらかであることが指摘されているのである。此の意味で怒ると身体に障ることが明らかにされている。

それ故夏をやすらかにすごすことは、何事も過不及なく、敬んで天の時に順うといっている。もし心の安定を欠いて怒るようなことがあると、秋に心臓をいためる。それ故、夏は怒ることが一番禁物ということになる。元来不摂生は一シーズンをずらしてその果があらわれて来る。春なれば夏に、夏なれば秋に病となってあらわれる。これはたとえ病としておもてに出なくとも、肉体を障碍していることになる。

だから夏の病氣は春の不摂生によるので、肝をいためることを告げている。肝というと肝臓ばかりではなく、それに関連するものも含まれる。夏に消化器系統の病氣の多いわけである。夏調子が悪るければ春を察すること。この意味で大切であり、それで秋の用意が出来るというべきである。肝はまた目也といつて肝の様子が目でうかがえる。眼色に変化

のある時は必ず肝に変化が起っている。よく肝炎をやると目が黄色になる。また視力がおとろえて来る。目に力がないのも肝の衰弱をあらわしている。逆に目がいきいきとして鈴をはったようなのは精力が絶大である。肝は精力に大きい影響がある。また面白いことに魂は肝に居る。魂が静かであれば乱ずともいっているのは、俗に肝気高ぶるといって、肝が乱れると怒りほくなる。だから魂が肝にいらするようにみたのかもしれない。このように夏は肝を中心に、潜在的なものをみる必要が起る。また肝は血流に影響があるから、その分布が平衡をかくと脳が充血したりして、その結果イライラするような現象が起って来る。イライラするのが高じると怒と変るから肝の乱れが頭の方に影響してゆくのがわかると思う。魂が怒った事になるのはこのようにいささつによる。さて、このような時に私のよく使う処方がある黄連解毒湯という。

黄連一、五 黄芩三、〇 黄柏三、〇

梔子二、〇

方中のものは消炎作用のあるものばかりで、主として食毒を去るのに使用される。長

い間の飲酒とか偏食によって出来た食毒を去るによい。黄連は血液の分布を平均にするから脳充血がとれて、イライラしなくなり気分がよくなる。だから脳溢血とか、その他の種々の出血、咯血などによい。皮膚の掻痒症に効くことがある。またこれで血圧がさがった人がかなりある。近頃のマネジャ病にもよい。

次に、この湯液の治験例をしらべてみるとかなり、食生活に矛盾があつたのがわかって来る。食毒が影響していろいろの病状を呈していたのが毒が除かれることによって治癒するのである。近頃は洋薬の中毒、例えば神経安定剤などの中毒症にも利用される。モルヒネ中毒に人参が用いられる事を知る人は少ない。然しこのようなのは特殊の場合に属するが、知らないうちに食事の偏向から一種の中毒を起して慢性になっている。これに輪をかけているのが近頃のインスタント食料である。なかには発癌作用のあるものもあるかもしれない。たとえあつてもすぐあらわれないから手におえない。自然から離れるところに危いものが出そうである。また好みのなかに

もいろいろの肉体の偏向がある。甘味のものがすきなものには、胃のわるいものが多い。塩気のきついものがすきなものには、腎臓がわるいものが多い。

身体に悪るいものが好きという慾望で、あらわれて来るのもおかしいが、また自衛のために嫌いという相であらわれて来ることもある。けれども元来食品は、その季節季節のものを摂るのが原則である。菴の時節には菴

を、西瓜の時節には西瓜を、それが自然である。漢法では自然的であるのを敬って天に順うというわけである。

私達の肉体は、極めて自然的である。人工には本来弱いのは、あたりまえで、それに堪えるにも自ら限度がある。だから漢法では自然の心を識るのを道といってよいと思う。それ故また、合道といえ、帰命するにほかならない。だから自然の心に帰命する事になる

が、自然の心は無心であるから虚心合道というわけである。だから帰命して、この時はじめて、染汚の身心が、融けはじめ、世界が消える。ただすがすがしさだけが浮く、内なるも、外なるも、ありとしある存在も穩躍自在なのを自覚する。そして次に、弥陀の誓願が実相となって現前する筈である。従って、健康は信心の道にしたがってはじめて、その意義がはつきりしてくるのである。

教義すら捨てぬ

ある時、釈尊はこう説法されました。

「新しい天地を求めて、長い旅を続けている人があった。ある日、その人は大きな河に出逢った。こちら側は荒地ばかりである上に、

河を渡った。その人は大いに喜ぶと同時に、自分を渡してくれた筏に対して感謝した。そこで、その人はその大切な筏を捨て去ることができないと考えて、筏を頭にのせ、肩に荷

た方が、筏に対してなすべきことをなしたといえるのである。それと同じように教義といえども、執着すべきではない。長い人生においては、橋も舟もない大きな河に出逢うことがある。そして仏教の教義によって、無事に向う岸に渡り、

猛獸毒蛇も住んでいたが、向う岸をみると、青々として草木も繁り、美しい鳥が飛んでいるのが判った。その人はその河を渡らなければならなかった。しかし見渡す限り橋も舟もなく困ってしまった。向うの岸にゆくには、筏をつくるより外に方法がなかった。その人

しかし、このように考え、筏を離さず持ち歩く人は、決して筏に対してなすべきことをそれと悟ったならば、教義すら捨てるべきも

更に安全に旅を続けることができる。しかし旅人が、河を渡って向う岸に着いたなら、筏を捨てよう、教義すら捨てなければならぬ。決して執われてはならぬものである。

先立たれた方を偲び、追善回向する事を法事と申しております。或は法要、法会とも申します。仏事とも申しますが、厳密な意味から云えば、仏事、法事、僧事と区別されて、この三つを行う所を寺と申すわけですが、今日では皆同じ様な意味にとられています。

先亡の追善は常楽会、追善会とも申します。法と云うのは「道理」と云う事です。正しい道理にかなった集りであり、故人を追慕する中から、お互に正しい道理を理解し合い、正しい道理にめざめて来る所に法事の意味があります。

仏教では釈尊の説かれた数々の正しい道理、法にもとづいて、自己を反省し、毎日の正しい生活の基として参るのです。

年回法要等と云って、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、廿三回忌、廿七回忌、卅三回忌、卅七回忌、五十回忌、等々申しまして、亡くなられた年から数えて、その御命日に、夫々の年回法要が行われていきます。そこでお気付きになるのは七と云う数字

法事

です。初七日、七々日と、七の字がよく出て来ます。十三回忌と云うのも七回忌から数えて七年目が十三回忌と云うわけです。そこで又十七回忌と七にもどり、又七年目で廿三回忌です。七々云うのは六つの迷いの道、地獄餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、この六つの迷いの道を踏み越えた七番目のさとりの世界へのあこがれであります。釈尊が誕生された時、天上天下を指さされ、東西南北に七歩ずつ歩まれたと伝えられているのも、釈尊の一生が、天地神明に恥じない中道を説かれ、さとり道の道を歩まれた表象です。

私共日常の生活は知らず知らずの間にこの六つの迷いの道を繰り返し繰り返し歩みつつけております。そとへ出れば交通地獄、入学

後藤 真雄

(東京・円通寺 住職)

にも就職にも試験地獄はつきものです。食べたいもの、欲しいもの、見たいもの、着たいもの、限りもなく欲望の浪はおしよせて餓鬼道の苦しみを味あわせてくれます。新聞紙は毎日の様に人として出来ない様な浅ましい畜生道の姿を報じて居ります。核武装だとか、ミサイルだとか、死の灰だとか、きのこと雲の様にまだまだ修羅あらしの暗雲は私共の頭上におおいかぶさっております。時たま平和な人間らしい生活や、映画やビックニックと天上の様な楽しみはあっても、帰り路は又地獄の道をたどります。

こうした姿を毎日々々繰り返し乍ら、私共の生活は続いています。然しそうした生活の中に私共の目標はどうぞいて、こうしたいま

わしい道を乗り越えて、平和な極楽の世界の実現への努力が続けられているのです。少しでも良く、少しでも速くと、賽の河原に石を積み想いで、繰り返し、やり直し、出直して、倦む事なく続けられるのです。

それは先立つた方々も又同じだったのです。私共はそのバトンを受けついだのです。文化の向上も、生活の向上も、この様に永い努力のうけつがれが生み出して来るのです。

先き立つた方の七年七年の法事は、こうした努力の受けつぎを、正しく再確任する事です。故人の過ぎこし方を想い起す時、そのつくされた努力、精進のあとは、くめどもつきぬ想い出となり、それは又その儘私共今日の生活、生きている私共へのはげしい、はげましの響きともなって参ります。

今日法事の会座にあらたまった気持ちで座り直す時、御苦労様でした、有難う御坐いました。私共力足らず、財とほしく、智慧ましくとも、どうぞして、あなたの御意志を受けついで努力して参ります。御安心なさって

阿弥陀様のもと、極楽の世界に安らげくお休み下さい、そしていたらぬ私共をどうぞお見守り下さいと願わずにはいられないのです。

そこに法事の尊い意味があります。

法然上人はこうした人生のたゆまざる努力の道、生き甲斐、死に甲斐を念仏の中に見出されたのです。

「もし能く称名すれば、仏名の徳として、妄念自ら止み、散乱自ら静まり、三業自ら調うて願心自ら発るなり」と。

これは法然上人が云われた言葉として十六門記に出ている事です。

唐の善導大師は往生礼讃の日没無常偈に、「人々はあわただしく、いろいろな仕事におわれおわれて、年と命の時々刻々に過ぎて行く事をうっかりしている。灯が風の中でいつ吹き消されるかわからない様に、はてしなく六つの迷いの道を繰り返しさまよって行く先きのさだめもなく、さとりを開いて苦しみの海を出る事が出来ないのに、どうして驚きおそれることなく、安閑とし

ているのだ。皆よく聞きなさい。まだまだ丈夫で健康で力のある間に、自らはげまし、自ら鞭うって、変ることのない世界を求めなさい。」と云っておられます。

法事の意味はこうした道理にめざめることです。

忙しい毎日の中から日を定め、時を定めて、あらたまった気持ちで、お寺の本堂に坐る時、故人を知る親戚知己、夫々に想い想いに、故人の遺徳を偲び乍ら、誦経に耳を傾け、焼香に心をこめて、念仏する時、あなたの方の気持ちは阿弥陀如来を通じて、亡き人のたましいとふれ合うことが出来るのです。

法を聞き、法をさとるから法事です。

法然上人のおさとしは、唯口に南無阿弥陀仏と称え、心に阿弥陀仏、助け給えと念ずる事で、法の中に生き、法にかなった生活となつて参るのです。

念仏する事に依つて正しい人生の働き甲斐をさとつて参ります事こそ、本当の法事でありましょう。

★

★

三分間法話

その一

矢吹慶輝

大橋俊雄

西から流れて太平洋にそそぐ阿武隈川の支流、摺上川のほとり飯坂という山あいの村に浅吉が、佐藤留七の次男として生れたのは明治十二年二月十三日のことであつた。七歳の時桑折無能寺の良慶琳教の門を叩いて得度し、幼名浅吉を慶輝と改めた。無能寺は奥州きつての奉律の寺であつたから、幼ない彼も師の薫陶をうけて心を戒行に潜め、行を師にならわんものと、熱心に持律の生活を送り、彼が後ちに虻蟻に対してもかたく殺生戒を保つていたのも、又一度禁酒禁煙を誓つたからには最後までやりぬかねばやまないという信念をもつていたのも、戒律的意志の強固さか

らきているのであり、長じて東北支校に学んだが、事あつて転校の止むなきに至つたとき、名古屋の愛知支校をえらんだのも、ここには武田芳淳とか吉良説明という律風を守る先生方の在職していたためであつた。これには師の介添もあつたとはいへ、彼にとって当然な帰結であつたかも知れない。

支校をおえ上京して高等学院に入り、更に進んで当時の一般的な風潮として私学軽視の風のあつたのをうれい、第一高等学校から東京帝国大学に学んだ。大学では姉崎正治博士について宗教学を専攻、卒業論文には浄土宗における信仰の中心である阿弥陀仏の解明を志して、「阿弥陀仏の研究」をものした。卒業後は一時宗教大学や天台宗大学に教鞭をとつたこともあつたが、大正三年には姉崎博士の助手としてアメリカに赴き、ハーバート大学に学び、その後フランス、スイス、ノルウェー、スエーデン、ロシアを巡遊し、社会事業視察の傍ら、スタインの発掘した中央アジア出土の古写経の断片を研究して帰朝した。同十一年十月敦煌出土仏典の調査と三階教の研究をかねて再度外遊の途にのほつたが、彼

が研究を志した三階教は、支那仏教史上重要な位置をしめるものであらうことは従来から注意されていたけれども、資料がなくて誰も手をつけることのできないものであつた。思うに十九世紀以降、世界考古学の上で最大の出来事として学界にむかえられたのは、敦煌の発掘であり、この時発掘されたものはスタインやベリオによって英仏の博物館にもたらされていた。その中に三階教資料のおびただしくあることを発見したのは慶輝であり、その第一回外遊の折のことであつた。以来これを研究してみたいという願ひは念頭に去来し、その功は啓明会の補助を仰いで第二回の外遊によって達することができた。しかしロンドンに着き大英博物館を訪ずれた彼に、博物館は無慈悲にも資料の閲覧を拒否した。されどここで志をくじいてしまふような慶輝ではない。彼はここで一策をねり、この上は献身的に博物館の仕事を手伝い信用を得ることだと決意し、館の仕事に精出すこと一カ月余、その間おのずと彼の誠意と学識は、大方の認めるところとなり、却つて先方から、資料の複写を申し出るほど、好意的になつたと



会局長となり、関東大震災後の帝都復興に志ざすようになったが、それというのも彼が社会問題について一見識をもっていたからに外ならない。

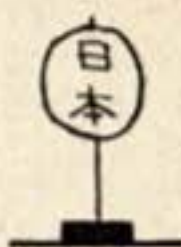
彼の深く尊敬していた人の中に颯田本真尼がおった。尼に慶輝が最初あったのは、まだ十七歳という小僧の頃のこと、酒田の震災慰問のついでに無能寺に立寄られた時である。

いう。この研究が「三階教の研究」として実を結び、学位を授与され、東大助教授に進み、恩賜賞をうける幸運にめぐまれた。

宗内で宗政花やかなりし頃、教友会と同志会があり、教友会は黒田真洞が旗がしらとなり、宗門百年の大計のもとに教学の振興に意をそそぎ、そのもとに育成されたのが渡辺・荻原・望月・椎尾の諸博士であった。その反対党であった同志会が雌伏十年の苦汁をなめた末、宗政のヘゲモニーを握るや、曾っての教友会に範をとり教学に専心した結果産み出されたのが慶輝であったという。越えて大正十四年四月東京市長中村是公にのぞまれて社

からは後に長く慶輝が親交を重ねた大島徹水が出ていることも、律につながる因縁があった。

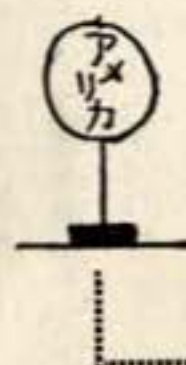
性格はどちらかといえば激情家であったが、他面友情に厚く後進をみちびくに親切であった。感情を表面にあらわすまいと、常に内攻的におさえつけてはいたが、時にはげしい気性をあらわすことも稀れではなく、それが学問上では特にみられたという。大島徹水の増上寺入山をつよく推したのは慶輝と原田靈道であったが、その慶輝が寺に育ち、無能寺を董すべき人であったにも拘わらず、学問研究のため寺をはなれ、一生を俗家ですこした。昭和三年の春、大門了康のなくなったとき鎌倉光明寺に出てはと、後住に推す人もあり、彼も「三祖さまの旧蹟復興ならば一奮発してみたい」と心も動いたが、遂にその事もなく、生涯を寺に董することなしに、同十四年六月十日、原田靈道の立派な往生のさまをほめ「僕も死ぬときには正念で往く」と口癖にいていた彼も、六十一歳を一期に安養の浄土に旅立たれた。法名を仏蓮社光誓上人増阿慶輝道人という。



アメリカ旅行 2

佐藤 治子

(鎌倉大仏殿内室)



ウインドショッピング

アイルドワイルド空港を郊外と反対の方向へ向って車は走り出した。その日は日曜日なのでニューヨーク市内を車の洪水にあわず走れるからなのだそうである。立派な橋を渡り有料道路の為広い道路にボックスが、車が通れる間かくをおいていくつもならんでいる。

通路で料金を払いマンハッタンへ入る。高いビルディングの立ち並ぶ市中は車が少く、ゆっくり走り乍らジョンがあればRCAビル、ここがタイムス、スクエア、この通りが有名な五番街などと説明してくれる。閉まってい

るが、豪華なかざり付けをしている店々のショッピングを三々五々、婦人達がガラス越しにみている。これがいわゆるウインドショッピングと云って買物をしないで只ショッピングをのぞいて目を楽しませている風景である。アメリカの習慣の一つに教会へきかざって行く婦人達は、そのかえりにブラブラと街をぶらついているのであろう。

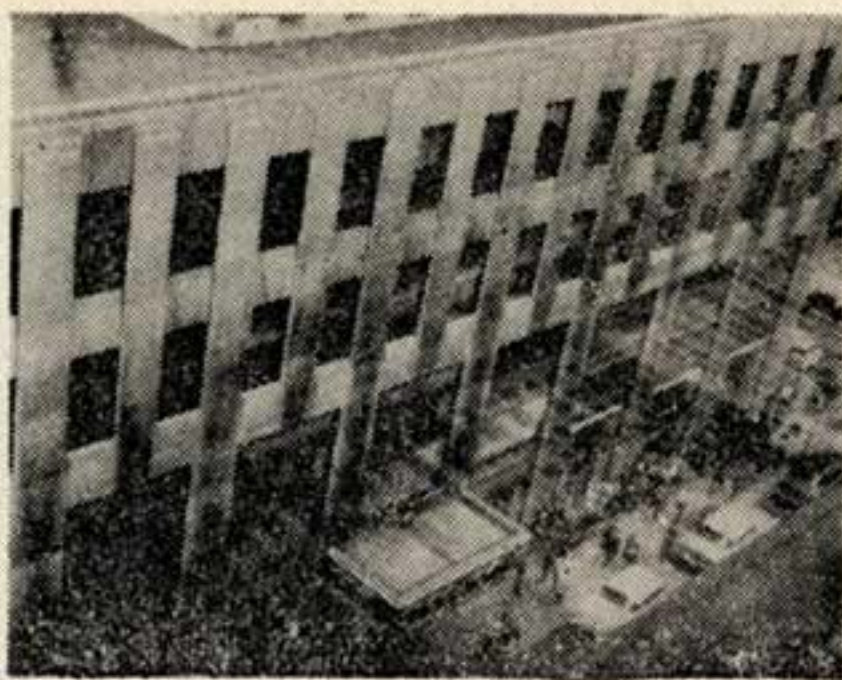
マンハッタンの大きな岩の上に、両側を河でかこまれているニューヨーク市の外かくをみて、西側のハドソン河に沿って郊外へと車は走る。ハドソン河の向うには、ニュージャージー州の大きな町の家々がみえる。ハドソン

河をはさんでニューヨークの西側の河沿いにアパートがいくつも建てられている。アパートがレンガ色に統一されていて処々に大樹がしげり、その中にハイウェイが通っていて美しい。この辺のアパートは高級な部に入るとか。大都市の周囲、しかも大きな巖を切り開いてハイウェイが続いている。丁度大庭園の一部分を走っている感じである。せまい道で無計画のままだに広く伸びている東京と思わずくらべてしまった。暫くして大きい森にさしかかる。そこを右へ折れ門番の居るゲイトを通って、マリオンのアパートの前庭で止った。

ここはニューヨークの中心より北へ汽車で二十五分かかる住宅街のブロンクスビルと云う処でよく写真でみたレンガ作りの古風な三階建のアパートである。大きな立木がビルをおおう様に枝を伸ばしている。美しい芝生う。ながされて芝生の小径を入口へ入る。そして二階のマリオンの部屋の戸をトランクを運び込んだジョンが「ここですよ」と云い乍らあけてくれた。アツとおどろいた。正面に新聞紙を広げた位の大きな鎌倉の大仏様の御修理

中の写真がはられてあったのである。御台座をもち上げ、職人が大勢働らいている写真。どこで手に入れたのであろう。日本でこんなを見た事もない。暫く立ちつくしていた。

ジョンと私



ラジオシティーミュージックホールを
かこむ人群。RCAビル八階より写す

思えばこの大仏様を、ジョンが終戦の十二月に日本に来て、大船の丘の上にそびえる観音様をみて、是非行ってみたいと艦へ帰えつて、どこだろうと戦友にたずねたら、皆それは鎌倉の大仏だと教えられた。次の休日に鎌倉で下車してはみたが丘の上に大仏様は見当

らず、ほとほと困っていた。それをみた学校の先生らしい人が自転車へのせて大仏の門前まで送ってくれたのだそうである。山門に入り数歩して大仏を遠くよりみたとたんにひきつけられてしまい、それより機会ある毎に来る様になった。段々と仏像の事をききたくなり、家の門を叩いたと云う事から、翌年の春まで時々方、仕事が済むと直ぐ家へ来る様になった。

帰国してから、お母さんから礼状が来てその中に「貴女も二人の息子さんが居る由（長男は芝中在学中、次男は七才だったと記憶している）、他処の国で自分の息子が他国の人に暖かに世話をされて、その母がどんなに感謝しているか息子さんを持つ貴女に、私のこの気持が分ってもらえる事と思う云々」と云うその一文は特に、忘れられない。当時ジョンは二十才だったと思う。真面目な学徒のセーラーであった。帰国してカーネギーインスティテュート（非常にむずかしい特種な学校だそうである）へ戻り卒業後ハーヴァートの大学院へ進み、勉強で忙しくなった。その間本人は元より、お母さん、姉のマリオンか

ら手紙をもらったり、出したり、かくして十六年の月日は立った。卒業後ボストンのアーサードリットルと云う会社へ入り、アメリカ政府よりエジプトへ出張を命ぜられたジョンは、帰途遙々と日本を訪れ、再会に来てくれた。

再びフィリップピンヘカンサルティンゲンニアとして政府より出張を命ぜられた時、日本へより私の家へ泊り、進駐当時見物出来なかった京都、奈良と見物をしたのである。

マリオンと私

姉のマリオンは三年前初めて日本へ来た。

三週間起居を共にし、毎朝、庭石にこしかけて大仏様を一人静かに眺めて、瞑想して居られるその御姿に何か非常に心うつものを感じた様である。そして香港、ビルマ、タイ、印度と旅をして東洋人と話し、その生活様式をみてかえったマリオンは、翌年再び日本だけをもっと深く知りたいと来日した。今度は裏街道と云ったものをみて、親しく農村の人達の生活或は都会人の生活のあり方などを直接学んだのであった。実際に仏教の影響による文

化の発展、特に目にふれるかけもの一ぶくに
しても、室町時代と水墨を知らずしてかん賞
出来ない。一度わかり始めるとするすると日
本の歴史を知りたくなる。



リスのいるマリオンのアパートと
前庭の一部分。

長い歴史を生活の中にしみこませている私
達日本人の生活、態度、教養等からアメリカ
で得られぬと云う東洋人独特の思想言動に何
ものか感じとったにちがいない。茶室、茶庭
から感じるワビ、とかサビの味い、そして仏教
美術から仏教そのものへと関心はたかまり、
この話を一夜主人と話し合ったマリオンは、
説明を通やくしてクタクタになった私に深く
感謝してくれたのであった。

今度私を招いて、友人一人々々に紹介して
くれて、私も友人間で何がマリオンをそんな
に日本へひきつけてしまったか、不思議に思
っていた事を知らされた。

日本を愛する人々が、今度私自身行ってみ
て、どうしてあんなに美しい国があるのに日
本にひかれるのかと或るインテリの二世夫人
と幾度か話し合ったが、私達日本人の昔から
しみついている物の考え方、心のあり方、人
に接する態度などからひきつける何かがある
とよりしか考えられない。日本独特のよい礼
儀作法は失いたくないと痛感した。

私によく手紙を下さった、お母さんは三四
年前に亡くなられたけれど、姉弟は私がお母
さんに似ていると云って親しんでくれ、特に
マリオンは何とかして私を招いて私の目にう
つるアメリカはどうか、彼女の友人は元よ
り、洋服屋くつ屋に至るまで私に会わせる計
画をたてた。自分の財産を明示する事を意に
介せず、長文の招待状と銀行の預金額を、銀
行で証明した二通の公文書もそえ、政府の許
可を得て送ってくれたのである。ジョンも物
の不自由な当時ミカンのかん詰、カンパンの

フライを分けあって喰べたのを、いつまでも
忘れられないと云って、私の為にポストンよ
り出て来て待っていてくれたのであった。

大仏様の写真はマリオンの親しい友人が本
屋でみつけ無理に手に入れてマリオンにくれ
たものだそうである。こう云う長い年月を経
た後、マリオン、ジョンに迎えられて、その
写真の前に暫く無言で、感慨無量で立ってい
た私の心持を解って頂けると思う。

アパートとリス

客間の長椅子の前のテーブルをはさみ、座
ぶとんがおかれ、先ず先ずと招じられた。ジ
ョンがすぐお琴のレコードをかけた。

くつをぬいで上へ上り、たたみへ座る習慣
を清けつたとあちらの人はよく云うけれど、
マリオンが三越で買ったザブトンがひかれて
あったのである。お茶好きの私を知っている
ので「治子、お茶」と云って日本のお茶わん
をテーブルにおいた。日本を出立して以来初
めての緑茶である。姉弟で至れりつくせりの
日本式の接待であった。涙がホロホロ出て来
た。ここがニューヨーク。ここがマリオンの

家。感慨無量の一言につきる。「治子はクラシックが好きだから」とマリオンが気をきかせ、レコードをかえさせた。言葉もなく「御気嫌よう」、「此の度は有難う」などと出て来ない。二人もだまって私の顔をみてばかりいる。

窓よりは大樹がみえ、ニューヨークの郊外とは思えない。ベッドルームを通りバスルームへ行き反対側の庭をふとみおろした。リス、リス思わず、さけんでしまった。芝生をチョコチョコ長い尾をひきずってかけたり太い幹へのぼったり。「まるで女学生みたいに治子はリスをみている」とマリオンが笑う。女学校でロングヘアローの詩をならった時の事が浮び出て来た。

ゆかたにきかえたらとくつろがせてくれる。夕食もそのままだと云われ、テーブルに二台の燭台にローソクを立て、大きいあかりは消して、お食事をする。十六時間でニューヨークへつき、今ここで二人にかこまれ、ゆかたで御飯を頂くとはついつい夢である。外国に居ると思えない。庭木のみえる座しきで鎌倉で外人と一緒に御食事しているとしか考えら

れない。英語だって、日本からもって来たそのままである。アメリカに来たなどとうしても考えられない。食後階下の夫妻が会いにいらした。治子と云って手を出された。ミセスサトウなんて云わない。あちらの人の名前もジュニバ、ワルターと呼び、名で紹介される。暖かく親しく待っていてくれた一つの表現であった。十一時まで五人でベチャベチャと話はつきない。

翌朝、食卓にヨーグルトが運ばれた。又々感激、私がヨーグルトを喰べるのをおぼえていてくれたの事である。それが日本の二倍の分量、とても頂き切れない。ジュース、トースト、スクラムブルエッグ、そしてお茶、今度は日本茶を私に入れさせる。

マリオンが一週間オフィスへ行くのは私に身体を休めさせる心組みである。ジョンが一日休みをのびし、今度は自分の車で迎えに来て二人のお父さんの家へ行った。マウント、バーノン、ブロンクスビルと云うあたりは中流以上の人達の住む森の中の住宅街。二人のお父さんの家には友人の老婦人が待っていた。二人とも「治子」と云って握手した。四

人でハドソン河を遊らん船でマンハッタン一周をしに出かけた。老人二人が治子あればエムバイヤステイトビル、あれは何々と耳が二つでは足りない様に目もあっちをみたり、こちらをみたり、次々と説明してくれる。ジョンは舟をとび廻って8ミリをとっている。「貴方が初めて見物に来たみたいね」と云って私はからかった。これは私にあとでみせる為、飛行場へ迎えに行く処から、飛行機から子供さんの手をひいて降りて来る私など全部とってあり、私に見せる為であった事がわかった。

「ハロー、治子」

このハローは日本人にはハイと同じこと故云いやすいはずである。ハローの代りに特に東部の人達は会うと「ハロー」である。初めてきいたので一寸おどろく。私は友人に会うとハローと出てしまう。老婦人エリザベスは私にとなりからつづいて「治子忘れもの」とハローをうながす。目を白黒、ハローと云った後で「オ、イーエス、ハロー……」と注しやく付きの「ハロー」である。皆笑いこける。二三日目にはハロージュニバと云った調

子になれて来た。勿論親しく毎日会う人とか友人間でのみつかわれる事であつて、知らないで紹介された時に「ハーイ」なんて云うべきでない事は申上げるまでもない。

ジュニバは「ハーイ治子」と云い乍ら毎朝新聞を届けてくれる。エリザベスとお父さんは「ハーイ」どうしているか、と朝必ず電話をかけてくれる。オフィスからはマリオンが午前、午後と私が在宅の時はかけて来る。一日がたちまちに過ぎる。午後はジュニバ、エリザベスと二人が車でかわるがわるマリオンの友人宅に、或は動物園植物園へと案内してくれる。七十才を越えたエリザベスが運転するのはおどろいた。日本では考えられない事だった。

夕飯は次々と招待される。マリオンはオフィスから帰ると地下のガレージから車を出しドライブして、招かれた家へ行く。ガレージも入れる場所が定まっていて、特別に月々料金を払ってる由、入れてない人は森の一ヶ所にパークする所へおく。市内にも郊外にもアパートは沢山あり、次々と建てられていたが、此のアパート位森あり庭ありで、広大な

土地を所有しているアパートは他に見なかった。

マリオンも仕事の都合上、お父さんの家を出てここへ住むのに、友人の銀行の副頭取の紹介（彼女もここに住んでいる）で財産、人物の保証がなければ六十人ほど待っている下積みで順を待たなければならなかったのが、トップに廻はされ、入る事が出来たとか、部屋の選たくよりも、空いたらすぐ飛びつかないと中々住みこめないそうである。二三日して気がついた事に子供の声がしない。マリオンにきくと子供の居る家族は一つはなれた建物に入るのだそうで、二つの建物は独身者と子供の居ない夫婦が住んでいるのだそうである。この辺が広大な土地をもち各自の経済力がしっかりしているアメリカの、日本と異なる所の一つである。森に遊んでいる子供も下の道路を通る時母親が大声を立てる子供をシッとしかって静かに通って行く。リスなど足もとにチョコチョコ走っていても、なれてるせいと動物愛護の精神が徹底しているせいか、いじめもしない。この風景は方々でみた。又しても日本を、そして、折角植えた、

花や木を折る子達を思い出した。きけばリスはネズミと同じで、食物をかじったりして困るとか。

或る夜、マリオンのとった日本のスライドをみた。写真クラブ員であつたので大仏様など実によくとれ、一人でなつかしく涙ぐみつつみた。その後、アパートの事を参考になるのでくわしくきいてみた。十八エーカー約二万坪に三つの建物があり（レンガ作り）一六七の家族が住まっていて、部屋に大小の部屋数の相異はあるがマリオンの部屋代はガス、電気代含め一四〇ドル、約五万円を上廻る。ガス、電気も使い方は実に良心的で、むだな事は決してしない。家賃に含まれているから、使い方しだいであつても仕方がないけれど、人にもよるけれど、かす方もかりる方も良心的で気持がよい。使用人が水でも流し放し、ガスもバツと強くつけたりする無責任さとは大分の差がある。シカタガナイ。

シカタガナイ

この言葉位便利な、ピッタリとそれを言いたい時に当てはまる言葉はない。マリオンは

NBCのオフィスや友人間までに流行させてしまった。ワシントンでかつて横須賀の司令官であった方の夫人、ミセス・ウィリングトンがパーティーで偶然に「シカタガゴザイマセ」ンネ」と私に云った時、マリオンは聞きとがめ、何故それを教えなかったかと不満であった。あまりに長いと云い辛いので略して、シカタガナイと。これは外人でもすぐ云えるので、そのまま流行させてしまったのである。

私は翌日ミセス・ウィリングトンにお茶に招かれていたので、それでは「恐れ入ります」と御礼の時おっしゃい、そして「ごきげんよう」とをマリオンに教えておいた。

翌日、美しい御住いでお茶を頂いた時、さすがマリオンは「恐れ入ります」、かえる時「ごきげんよう」を上手に云った。今度はミセスウィリングトンがあわてて、その意味を尋ねられた。マリオンはすっかり大ニコニコであった。日本へ来て日本人と親しくなるアメリカの人達は「アノネ……」それでね——のね——は何かと、よほど耳に入り易いに見える。ネ——は無意識に「ああそうね——」とつかうので、あちら語でがい当するものが

私には見当らず困ったものであった。マリオンは納得して「シカタガナイ」を弟ともやりとりしていた。実にかんたんで便利な言葉である。在米中、この言葉を親しい人達の中で外人仲間を使うのをきいてほえましく思った。ごさいません、など云っていたら、あはべラッとして来ないのでシカタがなかったのである。現在過去など教えたらもう絶体混同してむずかしくなるので、本当にシカタがなかった。これと同じに英語で、日本語に訳すとその気分がびったり表現出来ないものがある。「感慨無量」とか「もったいない」なども英語にあっても我々の感じと少し遠いので、マリオンは私がだまっている、「感慨無量の治子」と日本語で云ってからかったりした。

マリオンにはその意味がよく分る様であった。心の表現はおたがい特別な表現法があるので、二人でちゃんぽんにつかい分けたりした。物に対する味い方がちがうのが、日本に來た人々には理解出来るらしい。これも日本の魅力の一つかも知れない

教界トピック

★仏教東漸七十年

(S)日本仏教が初めてアメリカへ渡ったのは明治二十六年にシカゴで開かれた万国宗教大会で釈宗演、土宣法竜、芦津実全、八淵蟻竜の四人が出席して大いに日本仏教の紹介と宣布をした訳だ。

(K)此れを記念して今春に仏教東漸七十年記念会を結成したのだが行事、事業の内容は大変なものだね。

(S)英文の「日本の仏教」刊行や八月には八都市で予定される地方大会、もっとも全都市での開催は不可能だろうが、九月初旬の東京に於ける記念式典と仏教文化会議、まったく盛り沢山だ。

(K)続いて十月にニューヨークの仏教アカデミーホールで日米仏教文化会議をもつのだが此れに日本から七、八十人の代表が出席するらしいが、自薦、他薦と選考が大変だったらしい。

(S)それは兎も角、どうも此の記念会の

教化の始まり

中野隆元

教化を始めようとする人が、最初に云うことは、教化とか伝道とかは行って見ようとしても中々出来るものではない。どうも私には教化力が無い。亦私は性来話し下手でとか、私は未だ信仰がないから出来ないのです、とか言い訳許りを云って、行なわないものがあるそれでも、一ヶ寺の住職をして居るのだから不思議である。こんな風だから仏教が死者丈けを取り扱う葬式仏教と成って仏教が一般から蔭の薄いものに成って仕舞うのです。だから聖徳太子はお札に成って仕舞って和国の教主でなくなるのです。万事金の世の中で、お寺の住職が本堂を間貸して喰って行くようになったり、境内一ぱいに、ビルを作って旅館や料理やと成って仕舞い坊さんが店番と成下る訳である。「資生産業」此れ仏教も結構だが、住職は僧侶であり、小僧は番頭ではない

発足以来、周囲にもややとした空気が漂っているんだ。仏教界の宿命的な悲しさかな。

(K)まず六月に新宗連の大石秀典氏の常務理事の脱退だ。これは事務局の運営と企画が既成仏教への偏重を理由としているらしいが。

(S)いや、新宗連を加盟させたところに余りにも飛躍し過ぎたオカシサがある。何を狙ったのかは知らないが、教界紙は「新仏教と旧仏教の分裂」などと表現している

のだから、仏飯を頂く以上は何か僧としての仕事をして貰われないといけない。

そこで何をしたらよいのかというと、お勤めと布教ということに成る。毎日の読経香花の献供は、小僧でも出来るから、もう一段上のところを行うこと、此れが住職を権威付けるものとなる。それは何かというと、何んな方法でもよいから、布教することである。教化という言葉では、いろいろの一般の教育の方にもあるから、私は布教という。布教しない坊さんは僧でもなく、住職でもない。その

が……。新宗連は五十八の新興教団で構成され、仏教宗は立正佼正会・妙智会・解脱会など十三教団だが、従来から全日仏は対新興宗教問題と銘うって対応策をねっていたのに「今度は一緒にやりましょう」とは予想も出来なかった創価学会が入っていないからいいのかね。

(K)全日仏は新興宗教と握手したわけではない。若しそんな事したら各宗派が脱退するよ。此の記念会は全日仏ではなく、自由仏教徒グループの主宰だから、善かれ悪しかれ思い切った事をした訳さ。新宗連よりもお株を奪れた全日仏との問題の方が将来を含めて根深かいものがある。記念会は単に此の式典だけでなく、恒久的な動きと組織を意図しているよ。

(S)全日仏は四月の理事会で賛意は表すが積極的な加盟はしないし、全日仏傘下の宗派からの募金は中止して欲しいと申入れたが記念会はほとんどん集めている。十数年前の仏連を壊して世界仏徒会議を機会に今の全日仏を組織した頃と似ているよ。主謀者もね。

布教もやったことがないと中々出来ないものだ。先ず人みしりをしないことから始める。人と面接するのが嫌いでは住職の資格がない。面接、まず仏け心で人に遇う。いやな時、苦しい時でも我慢をして遇ってやる。面接したら、自分計り得意で話していけない。先ず先方の心持ちを察して聞き方に成ってやる。其の内に少々ずつ、信仰の話に引き入れて来る。先方の家庭の事情をよく聞いてやって、処世の指導、慰安講話・人事相談など喜んで親切に聞いてやる。

此れ等の助因が重って信者が増える。総べて「孝順心、慈悲心」でやる。此れが仏の心なのだから、先方が信頼して来る。先ず、和顔愛話ですね。こうやって来ると先方が有難がるより、先ず自身が有難たい気がして来る。これでよろしい。話の上手下手は先ず第二義です。今度は先方の家庭を訪問する。先方の家庭の事情に注意して祝祭、病氣、葬儀、通夜、盆、彼岸、暮、臨時の天災地変なぞを捉へて出張面会とくるが、永居は無用、簡単に手まめに働く。先方では、始めはいやがっても、段々喜ぶようになる。相手は忙しい主

人、妻女より老年者と子供を目標とする。青年の相手もよいが現代のマスコミの時代たることを了承してつき合うこととする。老年と壮年者とは目下は非常に異った心理状態を持つて居るから、一方に偏した話し方は失敗。亦家庭の主人たる主婦に嫌われては、布教は落第。併し余り好かれ過ぎて老母主人の悪口をお調子に乗って喋りまくると大失敗だから程々にする。特に婦人布教は六つかしいものだから、常に公明正大で一方のみ味方をしては家庭布教に成らない。亦服装、言話、動作に注意して、彼等に少しでも、成程立派なお寺さんだと理解せしむればよい。

次に檀家や信徒に、盆、正月、両彼岸会などには必ず、お寺に家族連れでお参りするようにいう。お寺は死んだ人の為め許りでなく、現在を幸福にし、親子喧嘩が無くなり、青年は立身出世する。名誉も地位も、お念仏をしたり、墓参りをする人に、不求自得の益がある。先ずお寺にお出なさい。そして住職に面会して三分でも五分でも法をお聞きなさいとやる。先ず成功の一步である。

(K) 一種のクーデターだ。全日仏から閉め出された自由仏教徒の反乱だともいうが

(S) だが全日仏の最高幹部達も「個人の資格」で名を連ねている。バスに乗り遅れたら大変と云うところか、矛盾しているよ。

(K) 国内会議のテーマも「近代社会と仏教」「仏教の国際的振興」「近代仏教徒の実践倫理」の三題目に各々、教議案があるが、全日仏の仏徒大会の向うをはっている感もする。(S) 内容も仏徒憲章の制定や国際交流問題など記念会側の云う旧仏連化した全日仏無用論の具体的ならわれた。然し記念会幹部にも数年前の全日仏幹部が沢山いる。此の人達の時代には南北仏教交流や対中国などにプライベートな動きがあると国際問題は全日仏で一本化すべきだと反対していたのに、今度は自分達がやるとは一寸御都合主義だね。

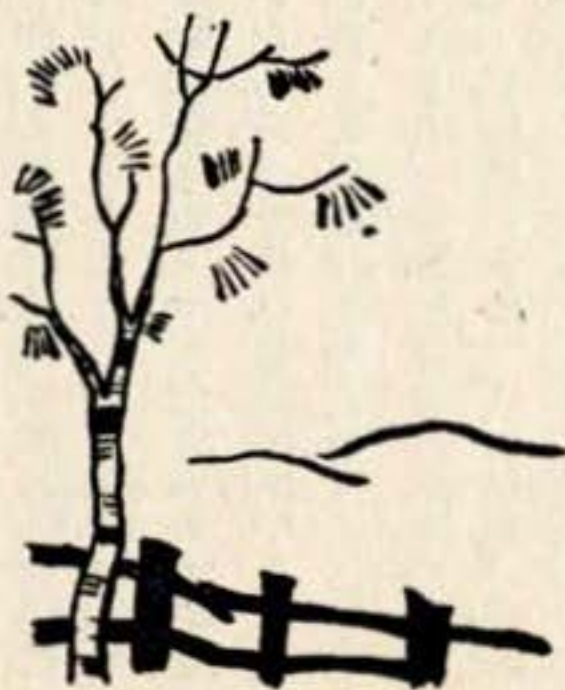
(S) ともあれ、時期に適した企画だし、筋を通して好結果を生んで貰いたい。官僚化した全日仏はこの機会に反省すべきだ。仏教界に二つの流れは不用だし、退歩させる事を両者共、知るべきだ(六、一四)(S)

浄土宗入門

その一

戸松啓真

(大正大学助教授)



一、はじめに

宗教とか信仰というものは、全く不思議なもので、これを求めない者には一片のパンよりも価値のないものと思われるし、真実の信仰を得た者には価値の変換、生命の改革があらわれて、きのうまで感じなかった大きな力があふれ、人の心に新しい世界が展開してくるというようなものである。

一般仏教ではこのような境地を「さとり」というのであるが、この境地をあらわす言葉としてよく引かれるものに「柳は緑、花は紅」がある。これは蘇東坡の詩で禪家がよくもち

いるものであるが、私もまたこれが好きである。柳は緑で花は紅というのは、普通あたりまえのことである。なにもことさらに取り上げることでもない。しかし私達はこのあたり前のことに、なかなか気がつかない。日常生活に於ても、物事をありのままに見ることがむずかしい。なんでもありのままに見て、これを受入れることができれば、世の中は案外楽しいかも知れないが、欲だとか迷いだとかいって、そうゆかないのは皆私達の煩惱のなすわざである。ところが真の信仰を得ると、柳は緑、花は紅に見えるのである。柳や花が今

まで気がつかなかった美しい風光として、眼前にあらわれてくる。悟る前も後も柳は同じ緑であり、花は紅でありながら、しかも悟ったのちには、柳も花も今まで気がつかなかった価値がそこに見出されるのである。信仰とは一般的にいえば、このようなものであらうと思う。

二、浄土教も仏教

これから浄土宗の教えについてお話し申し上げるのであるが、それについて先ずのべなければならぬことは、ごくあたりまえのこと

とであるが、浄土教(宗)も仏教であるということである。このことから始めるのが、浄土教を理解するのに役立つと思う。従って仏教の目的も、浄土教の目的とするところも、根本的には一致するところがなければならぬ。それをこれから語りたいと思う。

先ず仏教はそれを学び信ずることによって、何を求めるのであろうか。この場合に、

仏教を定義することは、その長い歴史からいって容易ではないが、仏教の根本をなすものは二千数百年前に、釈尊が体得された「さとり」である。釈尊はこのさとりを得られて仏となられたのであり、その自覚された内容が仏教即ち仏の説かれた教えであり、それが全ての人の救済としての仏教の教理となって展開したのである。勿論浄土思想もその一つである。釈尊によって体得されたこの道は、また私達がそれに帰依し、実践することによって、私達も釈尊と同じように仏となることのできる道であるから、これを「仏道」といい、それは釈尊の「さとりの道」であると同時に、私達にとっては「さとりへの道」であるということができる。そしてこの釈尊が悟

った道は、釈尊によって創造されたというようなものではなく、釈尊が悟ると悟らざるにかかわらず存する永遠不滅の真理であって、これを「法」といい、釈尊はこれを悟って仏になられたのであるから、これを「仏法」とも「法門」ともいうのである。

三、三法印と四諦

それでは釈尊の悟った仏法を学び実践することによって、何を求めるのかといえば、既のべたように、私達もまた仏になることを求めるのである。仏になるということは、悟りを開くのである。悟りを開くとは、人生に於けるいろいろな苦しみのもとになる迷いの夢から目覚めることである。それは転迷開悟といわれる。それではこの釈尊が悟られた「さとりの」の内容は、いかなることであらうか。そしてそれをどのように説かれたかについて、釈尊が仏になられた後に説かれたという教えの中から、根本をなすものについて二三考察してみたいと思う。

一般にそれは十二因縁といわれ、四諦八正道といわれる。更にまた、仏法の根本的な旗

じるしという意味では三法印がある。三法印は仏教の教説が釈尊の「さとりの」をもとにしているかどうかを区別する規準となるものがあり、これが、またその敷衍されたものがないければ、仏教とはいえないものである。いわば釈尊の体得された根本思想の一つであって、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三つの真理がこれである。

釈尊は常にあるがままに、ものを見よと教えられた。自然を人間をあるがままに見た時、すべてのものは、うつり変るということ。は動かし難い真理であらう。川の水は絶えることなく流れているが、しかもそれはもとの水ではない。世の中の人も家もまたかくの如しと方丈記の作者はのべている。人間の世界の栄枯盛衰にあつては、諸行無常の感はなお更深い。そしてすべてのものは、無常なるが故に生滅するものであり、生涯の世界に存在することはすべて苦であるとする。諸行無常という場合には、三法印にはあげられないが、この一切皆苦がその中に内在しているのである。さらに、ここにいう諸行無常は仏教世界の根本命題ではあるが、後世いわれるよう

な現実逃避とか「あきらめ」ではなくて、ものがどのようなしてなりたっているかを知り、現実を正しくみつめることであり、現実の苦を克服してゆくという教えの大前提となる真理である。従って仏教は諸行無常にとどまっただけではないということである。

四、浄土思想と無常観

このことは無常観が強くでていっているといわれる浄土思想に於てもみられる。とくに浄土宗を開いた法然上人の選択集には、厭離穢土とか無常という言葉が殆んど見当らないし、またかつて哲学者三木清氏は、獄中であって親鸞上人の教行信証を読み、無常という語の少ないことに驚いたという。これは法然や親鸞の無常観が、現実逃避の無常観の流行した平安末期から鎌倉時代の乱れた世にありながら、そのようなものではなくて現実をありのままにみるという仏教本来の諸行無常に立つて各自の教えを確立したからであろう。

前にのべたように諸行無常であるから、すべてのものはうつり変り生滅する。それ故に「人生は苦なり」とみる。これは釈尊の人生

観の根本命題であるから、釈尊が最初の説法で語ったと伝えられる四諦、即ち四つの「道理」の第一番目に苦諦として説かれているのである。この苦は通常「四苦八苦」といわれるものであり、生老病死の四苦と、更に、愛する者に別れる苦しみ、求めるものが得られない苦しみ、憎める者と会わなければならない苦しみ、欲望や執着から生ずる苦しみを合わせて八苦あげている。これを思う時、私達は人生は苦なり、一切は皆苦なりという道理を認めなければならないと思う。更に進んで私達が、この苦しみを滅するためには、苦しみの原因が何であるかを知らなければならない。

諸行無常が現実の真のすがたとすれば、そこから当然三法印の第二にあげられる諸法無我印が考えられる。すべてのものはうつり変るということに徹すれば、いかなるものにも常住不変の実体はありえないという主張になるのである。ところが一般に人はただものの表面にとらわれて、常住不変の実体があるような執着をおこし、我執にとらわれるのである。ここにすべての迷の根拠があり一切の苦

しみの根源がある。釈尊はこの迷いや苦しみをとおこさせるものは煩惱であり、その根本は欲望の満足を求めてやまない愛、渴愛であるとのべた。四諦の第二苦のおこる原因として説かれている集諦がこれである。私達は心の煩惱のために迷いを生ずるが、この迷いを転じて悟りを開くためには、すべての煩惱の根本となる渴愛を制止して、なにものにもとらわれない絶対自由の境地に達しなければならない。このようなとらわれない境地が、三法印の最後にのべられている涅槃寂静であり、四諦の第三に説かれている滅諦である。この涅槃寂静の境地こそ仏教が目ざした究極の境地であり、煩惱の束縛から脱却したという意味で解脱ともいわれる。私達が仏教を学び実践することによって何を求めるかといえ、このようなとらわれない絶対自由の境地である。それはまさに仏である。浄土教でいう極楽とか浄土も、このような境涯をいうのである。

五、「さとりの道」と「すくい道」

釈尊は四諦の最後に、煩惱をなくして涅槃

の境地に入る実際の方法として道諦即ちさと
りへの実践道として八正道を示されたのであ
る。これは仏教の根本原理である諸行無常、
諸法無我を正しく素直に認識する正見（正し
い見方）をはじめ、正思惟、正語、正業、正
命、正精進、正念、正定など八つの修行法で
あるが、更にこの八正道をまとめて実践の法
としたのが、古来、戒定慧三学とよばれるも
のである。戒定慧の三学も、釈尊によって示
された八正道を敷衍した「さとりの道」で
あるということが出来る。

法然上人は、仏教多しといえどもすべて戒
定慧の三学を出でずといわれたが、しかも自
分のような者は到底この三学の修術にはたえ
ることができないといわれている。ここにも
う一つの道として選ばれたのが、仏の本願に
てよって救われ浄土に往生するという「すく
いの道」である。浄土教では「さとりの道」を
自力聖道門とよび、「すくいの道」を他力浄
土門とよんだ。聖道門浄土門といっても、そ
の求める究極の境地は同じであり、それは仏
になることであり、なにものにもとらわれな
い絶対自由の境地である。ただそこに至るた

めの実践法がちがうのであって、自然とか人
生に対する見方、認識は同じでなければなら
ない。初めに、浄土教（宗）は仏教であるとい
ったのはこの意味である。ただこの認識がた
りないと、浄土思想は極楽に生まれることが
究極の目的のようになり、そこからは現実生
活をいとう厭世的無常観しか出てこないの
である。浄土教の教えが、ただ念仏を申して極
楽に生まれるという来世主義だけであるなら
ば、浄土思想はもはや現代人の「すくいの道」
とはならないのである。

事務所移転のお知らせ

法然上人鑽仰会・「浄土」編集部
事務所は、左記の如く移転致しま
した。

今後ともよろしくお願い申し上げ
ます。

東京都千代田区飯田町一ノ二一

法然上人鑽仰会

「浄土」編集部

蛇捕りのこつ

ある時、釈尊はこの説法されました。

「蛇捕りが、大きな蛇をみつけて、捕え
ようとする。すると蛇は身をまげて必死に
逃れようとして、遂にその人にかみ付くこ
とがある。そのため、その人は死ぬかまた
は死なんばかりの苦痛を受ける。これは蛇
の捕り方が悪いからである。」

愚かな人間は、仏教を学びながら、十分
に研究し、深く考察しないから、そのため
真の意味をとらえ得ないで、誤解するため
永く苦しみを招くのである。ところが敬虔
な青年たちは、仏教を正しく理解して永
く、幸福を招くであろう。

たとえば、蛇捕りが、蛇を見つけて、注
意深く棒で押え、首を捕えたとする。そう
すれば蛇が己れの胴で、その人の手や足に
巻きついたとしても、そのために死んだ
り、または死に等しい苦痛を受けることは
ない。それはよくその蛇を捕えているから
である。

新浄土宗に望むもの

2

出席者 藤井正雄 (大正大学大学院)
 鈴木成元 (大正大学講師)
 石川孝之 (京浜女子大学講師)
 石上善応 (大正大学助教授)
 司会 浄土編集部

そこに仏教があるということ

仏教が生きているということ

司会 いわゆる曲り角といわれる浄土教、とくに教会的での浄土宗の歩みなどを。

石上 僕はね、話をいっぺんにとばしますよ。浄土教が曲り角なんではなくて、全部の仏教が、そういう段階だろうと思うんですよ。それでこれ、話が違いますが、最近アメリカのキリスト教の分布ということ聞いたんです。非常に面白い立場の方からみた話なんですがね。それによると、キリスト教といっても色々派があるけれども、そういういろんな派を信仰しているというか、教会に行くという人達は、ある意味で社会の位置というか、それによって教会に行く分布がだいたいできているということなんです。非常に面白いことだと思うんですよ。それによって色々な、何というのか、あくまでユダヤ教徒はユダヤ教徒でなければならぬ理由がある、ということ、そういうえばある意味の新しい意味のカースト制度式のものが、アメリカですら、プロテスタントですら生まれているというが

んじがらめの点があるということですよ。これは既成宗教の悩みだろうと思うんです。

それはさておいて、そういうことを考えておいて、日本の浄土教のあり方云々ということを考えてみると、なんとしても過去のことはどうでもいいことなんであって、これからの浄土教がどうあらねばならないかという大きな問題なんだね。こういうとき、今までの檀家制度だけをたよりにしている浄土教では、今のようないつのブロックだけの形になってしまっているのであって、これは意味がない。そうでなくとも、何というのか前向きな姿勢としては、何かそれにプラスしなければならぬものがあるに違いない。

それはまた別の点からいうと、これはインテリの一人が発表しているけれども、そこに仏教があるということと、そこに仏教が生きているということなんだよね。これは私達は耳をかたむけて痛いようだけれども聞かなくていいかんと思うんですよ。それが一般のインテリ層の解釈だろうと思うんですよ。いやそれに対して、いやそうじゃない。たくさん信者がいるんじゃないかということは、そこ

にあるにすぎないかも知れないし、だから前向きにするということとは、もっと活発な教化がなされなければならないという意味になつてくると思うんですよね。

こういうときに、一体我々にどんなことを浄土教としてしなくてはならないかということ、僕は浄土教の一番大きな眼目はね、罪惡意識だろうと思うんだ。これは過去の日本のいろんな仏教分派があつたけれども、それらには、罪惡意識を表面にもつてきたものはなかったと思うんだ。原始仏教においても、罪惡という意識はそれほど強くでていない。それはともかく、日本へ来て浄土教になって、非常に濃厚にだされていることは、一つの大きな特長だろうと思うんだ。そういうものをもとにして、現代人を大いにアピールする力というものを与える必要がある、と思う。と同時に、今度こそ宗教庁などで、その場に応じて今はこういうものを表面にだしてやるべきだという指導方針をうちたてる必要があると思うんだ。これをしていなければね、意味ないと思うんですよ。

良い布教者こそ必要

司会 仏教がだめだとか、浄土教がだめだとかいうが、だめではないと思うんですね。問題は、それをつかさどる人間がだめなんではないですか。

石上 それもいいたい。現代語訳するとかね、それから何か新しい言葉で表現しよう



写真には知恩院 御影堂

かいうことは、第二義的なことなんだ、實際の話は。それよりも、創価学会をみてもらんなさいよ。あれは組織的なものといえればそれまでだけど、新興宗教の働きをみるとね、法華経そのままをそらんじているじゃないですか。決してそこに新しいものはないですよ。

ないけれども、やっぱりそういうところに滲透して行こうという意味があるから、それだけの働きが出てきているんじゃないですか。やはり問題はね、人間は当然なんだ。だから人間がもことになるということは、どんどん前向きになって発展することでしょうね。で、それに付随して、色々なことがでてくるだろうと思うんだ。

鈴木 そうですね。強固な意志で、そして活発な行動をするということは、事実ですね。歴史をひもどいても、本当に血のでる思いでやっていますからね。

だから、教えがやさしいから津々浦々までに拡がるのではなくして、布教者が、何とていうか夢中になって布教させるんですね。その熱意がうけられて信者になる。それで、やはりそういうところを見逃してはいかんと思うんですよ。

石川 最近ではマスコミも発展していることだしね、外に出る傾向が多くなって来ているでしょ。すると例えば、農村の場合なんかね、若い連中が外に出て働く。そういうとき宗教のあれにふれるという場合ね、そういう

たものを家にかえって、外にでている関係でいろんなことを知っている面ですね。発言の度合が強くなってくるんですね。そうしたときに、例えば創価学会なら、創価学会というものにさそわれたようなことを話した場合、その人が段々と近づいた場合、その家庭というものがね、そういう傾向になってくるんですよね。

私の学校の辺は、農村地域とはいえないのかも知れないけれども、むしろ都会化している地域と見た場合にね、非常に外に出る場合が多いんですよ。そうすると、外に出ていく人の力というものは、その家庭を動かすという傾向が強くなっている。

鈴木 そう、それはたしかにそうですね。田舎にいきますとね、都会に出てくる人はインテリだと思っていますよ。それは職工していても、何でも新しい都会にいったって、新しい空気をすすってくれば、これはもう時代の先端をいくんだと、そういうあれがありますね。

精神教育を望む

司会 色々と御意見をお伺いしましたけれ

ども、法然上人の説かれた念仏の教えというものには問題なく、むしろ司さどる人達が問題であり、いわゆるその教団が問題なのである。しかし、えてして知識階級の人なり、坊さんでも大小の学者グループは、とかく今の浄土教はだめだといったがる傾向にあります。

浄土宗の場合は、年配の支持者が多いと思うのですが、それにひきかえ、不毛の地といわれるくらい青年の教化が、非常に遅れていると思うんです。とくにこの教団が二つになって、若返えっていかねばならないと思うんです。

ただ念仏をしなさいといっても、信じない。むしろ信仰を確立するにも、解信の方でいききたいというか、ある程度、納得したら信仰をもとうという面が現在強いと思うんですが、そういう点いかがですか。

鈴木 それは確かだと思いますね。で、この教義のことになりますけれども、教義というものは、要するに法然上人のときにできたんじゃないと思うんですよ。根本はそうでしょう。しかしですね、法然上人のものを、聖

光は聖光流に解釈し、その解釈を良忠は良忠流に解釈するでしょ。その解釈の相違が、どうして生じてくるかということのみなくてはならない、と思うんです。

例えば、法然上人が念仏を申せば、極楽に行けるんだといったのと、法然上人のジキ弟子の聖光が念仏をすれば極楽にいけるということの比重が、どちらが重いかということですね。法然上人は「南無阿弥陀仏」と申せば極楽にいくことができるんだといえ、それで人々は納得して、そして念仏するだけの力ンロクがあつたのではないかと思うんですよ。

ところが聖光になると、法然上人の通りにいったんでは納得できない。それで少しずつへりくつを加える。そうしなければならなかったというような時代の相違、あるいはカンロクの相違などはたしかにあつたと思うんですよ。

石川 話が一寸飛躍するかも知れないけれどね、うちの学校の例を掲げてお話しますとね。両親の立場からすると、子供達に何か精神教育をしてもらいたいという望みが、非常

に強いんですね。

それで、例えばお寺さんをまわってみますと、あちら（鎌倉）は禅宗が多いから、禅宗のお寺、まあ、建長寺などにいくわけですが、色々先生にお話をきいてみますと、自分が浄土宗だからというわけかどうか、それも



知恩院

七百五十万監塔

あるかも知れませんが、布教方法なんかは、浄土宗は非常に発達という大変ですが、わりあいアピールしているんじゃないかと思うんですね。光明寺さんの大野先生の話も、また上手だからかも知れませんが、あるいはまた、安養寺さん、そういった人達にきくだけなんですよね。そうすると非常に仏教という

ものを浄土教というものを、現代の生活に生かすんだということが強調されているように思うんですね。ですから、わりあいわかりがいんですね。

他方、これは去年感じたんですけれども、ある寺らは、仏教の教理なんかをやさしくしている努力はわかるんですけれども、何かうったえるものがないんです。そういう点では現在の層に生かしていくという浄土宗の人達は進んでいるのではないかと思うんですけれど。

しかし、先ほど石上先生がいわれた「仏教がそこに生きている」ということと、「ある」ということを非常に面白いと思ったんですけれども、たしかに、たくさんお寺はあるけれども、今いったように、両親などはそういうことも、今いってあるんだけれども、どうもつなげる機会がないんですね。実際それを求めていくけれども、どうも足がそっちへはこばない。そういった気持ちにならない。そこに何かあるんですね。

鈴木 若い人というのはね、何か仏教というものは良いものだという考えがあるんじゃないかと思うんですね。

ないかと思うんですね。

石川 実際ね、生徒たちは日誌を書くんです。修養日誌、自分の反省を。そういったとき、最近、西洋のエチケットということがさげばれていますが、それと同時に、古来の東洋のいわゆる純日本的な女性の美徳というものを、自分たちも身につけたいという意識は、小さくても小さいなりにもっているんですよね。そして畳の生活をしているんだからきちんとした坐り方をしたいという気持ちも持っており、そして、祖先に手を合せたいという気持ちも持っているんですね。ところが、こうするまでに、自分の心が何かにじゃまされてしまつて、せっかくそこにそういう雰囲気心の心に目芽えても、何というんですか、抵抗を感じるわけですね。

司会 仏教は何というか、静的な面で、仏教、仏像をどうして影響力はあると思うんですが、新宗団というものはもっとダイナミックなものでなくてはならないと思います。そういう面で一つ、今後の浄土宗への期待を、発言していただけませんか。

鈴木 私はね。布教の面ですけどもね。

「南無阿弥陀仏」という字とかね、言葉ですね、そういうものを出さないで、そしてその氣持を發揮させるというような方法を、こうしなければいかんと思うんです。

石川 やっぱり、生きるというところから行かなければならないんですね。

石上 今のはね、へたをやると誤解されますがね。こういうことなんですよ。

私自身もいくらかそういうことをやって来た経験からおしてね、今までの生き方をしてる人からそれを見れば、はずれているようなことがないとは断言できない。それから、仏教の用語を使っていないから、使っていないじゃないで、今自分のいいたいことはこういうことをうしろに秘めて話していることも、間違っているといってもいいくない。

とに角、今やっていることは、浄土教の精神をとってやっているという氣迫を、みんなが感じとっていったならば、またそういう風にして実際にやっているならば、そういう人達を無げに批難するようなことはしないで、進めるといことが一番大切なことではないか、とくに若い人にはそうだろう。若い人の

中でも、ちゃんと称える人もあるかも知れないが、多くの人は反駁するだろう。その反駁する人達がある意味で引っぱろうとして、そこではじめて、引っぱってきてからは、どのようにしてもいいんですね。

青年部の仏教運動部をやってますと、一番最初はただ話をききにくるんだ。面白いなというんだ。これが第一回ですよ。その次に、仏教というものはみなおしたという意味になってきて、これから次に一日結集式のようなことをやると、手を合せるという風になってくる。これが一般の、全然関係のない人達の生き方ですね。だから、除々にもっていき方を、悪いといわないでもらいたいということだ。

それから、例えば、弁栄上人でないけれども、何か、ダイコン、ニンジンでも、それが念仏のかわりでも結構だということをいっておられるでしょ。あれと同じ生き方だろうと思うんだ。あまり言葉にこだわらないで、入口は、これは大切だ、若い人に。

藤井、僕もね、同じ意見なんですよね。結局日常生活に展開されて始めて、仏教は生き

ている。例えば、アメリカでね、禪がどうしてはやるか。機械化で、人間の精神がおいついて行けない。そういう面から、静かに座禪を組むことによって精神安定剤となる。そういうところ効用を求める。これはアメリカで、ブラグマティズムですか、そういう国ですからそうなると思うんです。とくに、日本の現在の青少年の犯罪をみると、肉体ばかり大きくなって、精神がともっていない。精神と肉体のアンバランスから、ああいったものが起ってくる。だからそういった面で、やはりそういった精神と肉体のバランス、空白をうめるのが仏教であると思うんですよ。とくに、浄土教である。新興宗教が非常にはやっている。これを逆にみると、皆が信仰を求めている。それに今までは、浄土宗が末法くさいというふうに敬遠されてきている。だから今こそ、日常生活に展開されるような手段をもつべきだ。その手段は、一概にこうしろということはいえないけれども、そういう方向にもって行ってもらいたい、と私は思う。

司会 どうもありがとうございました。

編集後記

▽現代は一個の力より集団の力が必要であり、より効果をあらわす時代である。ときに、暖水盆に返らずのジシクスを破って、分裂していた浄土宗門が永年の悲願である合同が実現できたことは、まことに教界のためによるこばしいきわみである。ともかく紆余曲折があつても、目先の小さな感情をすてて本当に将来に生きる宗団のために合同したことは、宗門人の理性と善意の支えがあつたからである。

現代宗門人にのぞまれることは、個人が生きていくために自我を強調するより、宗門が生きていく中に生かされる個人の自覚にたちかえることの必要性であらう。

▽この意味からしても、宗門唯一の雑誌として「浄土」の使命の重大さを感じる。ときには、すべてを投げだしたくなるようなピンチにおそわれることもあるが、また、永年支援して下さる会員諸氏に力づけられて勇気をふるい起すことたびたびである。伝統を生かしつつ新しい現代の生命を甦らせる急務を感じながら、さ

さやかな努力を重ねている▽鐵仰会生みの親である真野博士と共に、創立以来同人としてこの運動に挺身されてきた佐藤賢順先生の急逝は本会にとつても、又宗門、全仏教界にとつても大きな痛手である。そのあとをうけて同人の佐藤密雄、良智、中村、竹中、村瀬の諸氏もあらたな決意をよみがえらせている。

▽こんど編集部は若返り、水谷哲雄、佐藤行信、佐藤成順のほか、事務局に芹川博通君が新鋭として参画した。
(宮林)

暑中お見舞申し上げます

法然上人鑽仰会

浄土編集部

「浄土」講読規定

一部定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年七月廿五日 印刷

昭和三十七年八月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿一

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

伝通院本 大般若經解説 新刊 堀口蘇山著

目次

○大般若經刊行願主立誓行誡、○大般若經木板刊行の企劃、○大般若經木板刊行総監細谷琳瑞、○琳瑞大般若經木活字板刊行企劃
○木板刊行企劃より木活字板刊行へ、○勝海舟大般若經刊行に賛意、○甚兵衛邸に於ける木活字板着手の下相談、○吹上御苑に於ける木活字寄進談、○木多村直寛木活字寄進、○甚兵衛邸に於ける木活字寄進の祝宴、○大般若經初摺慶祝会、○大般若經遅刊とその世相、○伝通院一山の炊煙と清浄心院摺写場、○俊光貫主大般若經刊行成就を祈願、○大般若經続刊の目処、○信の力は馬連を動かす、○大般若經摺写完成、○木活字板大般若經概観、○大般若經配本領収証、○伝通院本大般若經不伝の理由、△雜纂、○願海大般若經摺写場見学、○行誠願海を廻想、○琳瑞兎双厄と願海通世、○般若十六善神祭（琳瑞初七日忌逮夜追善会）、○琳瑞初七日忌と一切經刊行の言葉、○伝通院と西光院（徳本行者と蓮忍尼僧）、○大般若經扉絵筆者菊池容斎、○扉図及挿図解説。
△扉図三葉、挿図三十三図、悉皆根本資料、安養虎角製本型
以上

三百部限定版、伝通院本大般若經三百部梓行に因由。
摺写着手満一百年記念出版
頒価実費金七百円也。送料金百円也。

東京都中野区野方町二ノ一五七四
芸苑巡礼社
電話(385)一三三八番
振替口座東京七八三四一番

日本一の生産・設備

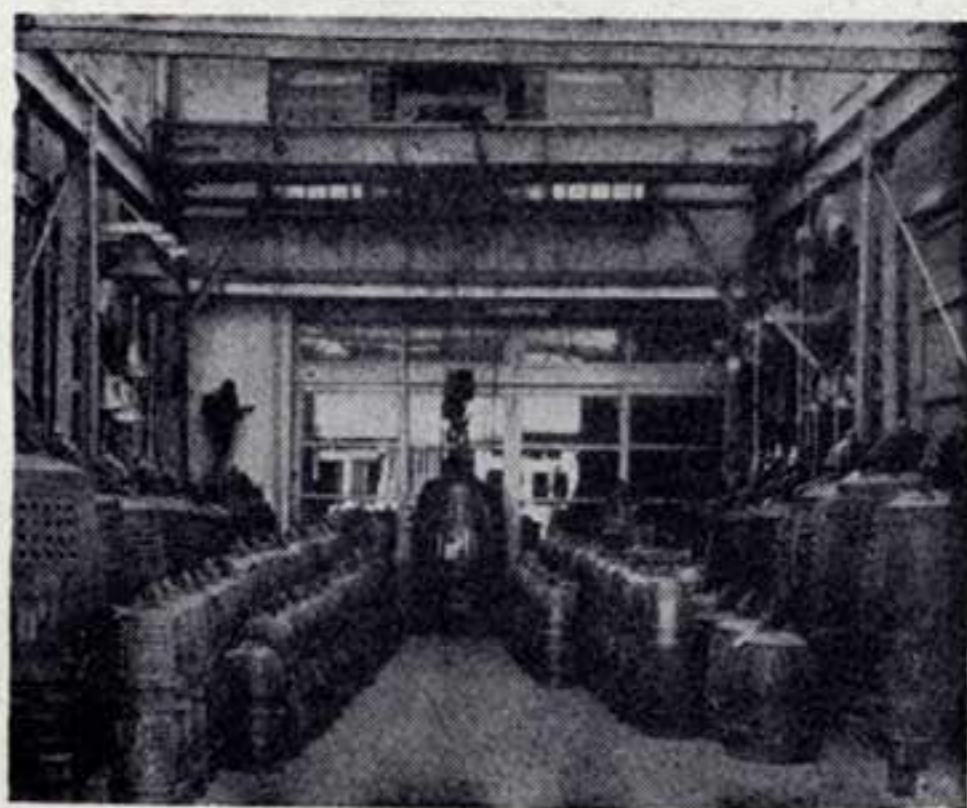
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鑄物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 340 8847番 本社工場 高岡市横田